現在のところ，この福井県丹生郡朝日町のものが，この植物の唯一の自生地と考えられる．

標本の閲覧の便を与えられた京都大学植物学教室，国立科学博物館，東京大学総合研究資料館，および，東京都立大学牧野標本館の各関係の方々にお礼申しあげます．

引用文献

北村四郎編註 1977. 飯沼慾齋原著 草木図説 木部（上），p. 203，図45. 保育社，大阪.

Koidzumi G. 1913. Conspectus Rosacearum Japonicarum. J. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo **34**: 131.

Makino T. 1902. Observations on the Flora of Japan. Bot. Mag. Tokyo **16**: 87–88.

Ohwi J. 1953. New names and new combinations adopted in my "Flora of Japan". Bull. Nat. Sci. Mus. No. **33**: 75.

大分県植物誌刊行会 1989. 新版大分県植物誌，pp. 806. 大分県植物誌刊行会，別府.

静岡県生物研究会 1967. 静岡県植物誌，pp. 585. 静岡大学教育学部 遠藤庄三，静岡.

杉本順一 1984. 静岡県植物誌，pp. 812. 第一法規，東京.

植松春雄 1981. 山梨の植物誌，pp. 595. 井上書店，東京.

植村甚太郎 1923. 富士山植物誌，pp. 416. 任他樓，名古屋.

（[a]福井県立博物館，[b]富山大学理学部生物学教室）

四国のサクラガンピ（山中二男）

Tsugiwo YAMANAKA: *Wikstroemia pauciflora* in Shikoku

四国のガンピ属の植物には，ガンピ，コガンピ（イヌガンピ），キガンピ（トサガンピ），ミヤマガンピの4種が以前から知られていた．その後，サクラガンピの類があることがわかり，赤澤時之はヤマサクラガンピとよび，*Diplomorpha sikokumontana* Akasawa in Bull. Kochi Wom. Univ. Nat. Sci. **25**: 4（1977）を学名とした．しかし山中はほかの人の意見もきき，高知県の植生と植物相317（1978）では，これをシマサクラガンピとして記録した．ただ，この取り扱いには気がかりな点もあったので，あらためて多くの個体をくわしくしらべてみた．

赤澤はサクラガンピやシマサクラガンピとの異同にはまったくふれていないが，四国のものには，両者の形質が見られることがわかった．

葉，花序，若い枝などの毛は，九州本土や屋久島のシマサクラガンピにも多少があるが，傾向として四国では多く，むしろサクラガンピに似る．萼筒は5〜6mmで，両方との違いはほとんど無い．

Hamaya（1955a, b, 1959）が区別点として重視した葉と花序には，四国では変異がめだつ．葉の多くは楕円形から卵形，基部はくさび形から円形，先は鋭頭または鈍頭でしばしば凸端になるが，鋭先頭または尾状に伸びることはなく，これもサクラガンピに近い．大きさは場所や株により多少異なるが，大きな葉で，長さ45〜85 mm，幅25〜35mmである．シマサクラガンピは屋久島ではごく少数しかしらべなかったが，長さ65〜75 mm，幅30〜40 mm，大分県の尺間山ではそれぞれ40〜65 mmと20〜35 mmで，四国のものをこれで区別することはできない．伊豆半島のサクラガンピは，長さ30〜45（〜55）mm，幅20〜30mmで，やや小さいようでもはっきりした相違があるとはいえない．シマサクラガンピは，屋久島では葉が接してつき，葉縁の前後が重なるものが見られるが（Fig. 1–D），尺間山では離れるものから多少重なるものまで，かなりの変化がある．四国ではそれがさらにいちじるしく，サクラガンピのようにまったく離れることが多く，やや接するものはその3分の1程度，重なる例も少しある（Fig. 1–B, C).

花序では，葉がサクラガンピは徐々に小さくなるが，シマサクラガンピは急に小さく苞状にかわ

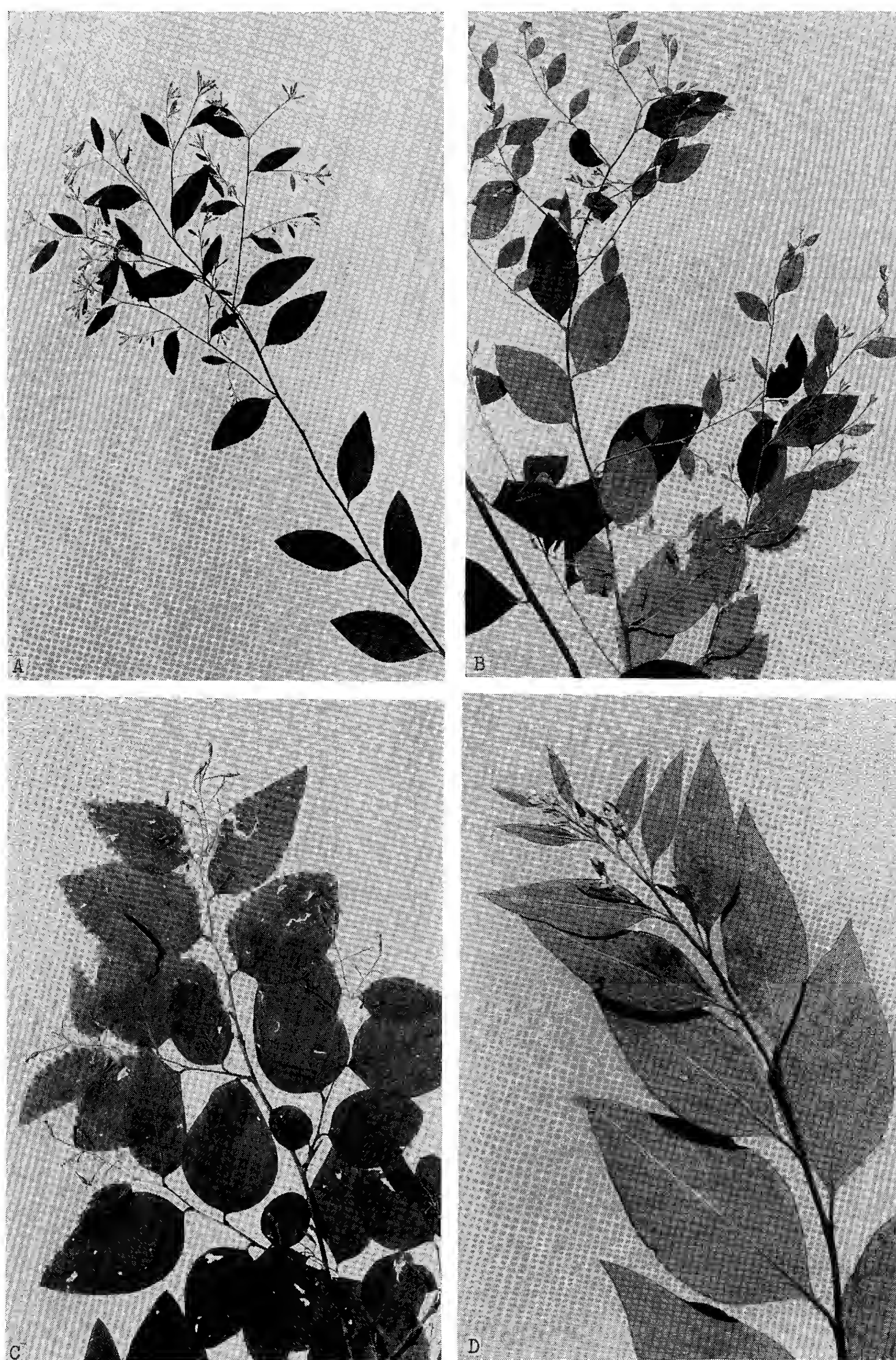


Fig. 1. *Wikstroemia pauciflora* from Numazu, Shizuoka Pref., Honshu (A), Monobe, Kochi Pref., Shikoku (B, C), and var. *yakusimensis* from Isl. Yakushima, Kagoshima Pref., Kyushu.

るのも，区別点とされている．伊豆半島ではこの特徴は明らかで（Fig. 1-A），九州でも見た範囲での変異は少ない．四国では，これらが混在し（Fig. 1-B, C），地域によるまとまりもなく，ときに同一株でも異なる枝があり，この点ではたしかに中間的である．なお，円錐花序の疎密も一様でない．

こうしたことから，四国のものは，標本だけではサクランガンピかシマサクラガンピかのいずれかに同定できるものがあるとしても，現地で見ると断定は容易でないし，それらと別の種と考えるはっきりした根拠も見出せない．ここではいちおう，サクラガンピと題して報告するが，なお今後の研究が必要である．

シマサクラガンピは *Wikstroemia pauciflora* Franch. et Savat. var. *yakusimensis* Makio in Bot. Mag. Tokyo **24**：52（1910）として記載された．Hatusima（1954）も九州本土ではサクラガンピと区別困難な型も見られるので，サクラガンピの変種とするのがよいとしている．Hamaya（1959）は形態だけでなく地理的に分布が離れていることもあって，種として区別する意見である．

いま，こうして九州南部と東部，四国東部，伊豆と分布することがわかり，しかも四国での変異から考えると，やはりこれらは同一種に含めるのが妥当かもしれない．

最後に，これらの分布と生育環境にふれておく．サクラガンピは，神奈川県の箱根と湯河原，静岡県では熱海と沼津以南の伊豆半島に分布する．平地から低山地の乾いた土地でよく見かけるが，海よりに多い傾向もあり，母岩がとくに変わったところではない．シマサクラガンピは，大分，宮崎，鹿児島の各県にあり，谷ぞいにも生えるが，低山地で岩石の露出したところでしばしば目につき，やはり特殊な母岩との関係はない．

四国では，徳島県木頭村の高ノ瀬峡から高知県物部村の別府（べふ）峡までと，ほかに物部村別役，根木屋，五王堂の地域に知られている（5万分の1地形図では北川と大栃）．分布の範囲は狭く，母岩とのつながりが注目され，これまでわかっている生育地はすべて石灰岩地帯で，海抜約400mから石立山の1700 m近くまで見られる．乾いた岩石地や礫地のイワシデ-イワツクバネウツギ群集に生ずるのが普通である．

この機会に，現地調査にいろいろお世話くださった静岡県の大村敏朗，野口英昭の両氏と大分県の眞紫茂彦氏にあつく感謝する．

（高知県[redacted]）

引用文献

Hamaya T. 1955a. A dendrological monograph on the Thymelaeaceae plants of Japan. Bull. Tokyo Univ. Forests **50**：45–96.

—— 1955b. Some taxonomical notes on Thymelaeaceae from Japan and adjacent regions(2). J. Jpn. Bot. **30**：328–335.

—— 1959. Dendrological studies of the Japanese and some foreign genera of the Thymelaeaceae — Anatomical and phylogenetic studies —. Bull. Tokyo Univ. Forests **55**：1–80.

Hatusima S. 1954. New and noteworthy plants from southern Japan and adjacent district (4). J. Jpn. Bot. **29**：230–238.

新 刊

□Brummitt. R.K. and C.E. Powell(ed.)：**Authors of plant names** 732pp. 1992. Royal Botanic Gardens, Kew. £24.00.

学名の著者名の省略の仕方は，データベースは無論，さらにはモノグラフやフロラを作る際に頭が痛い問題である．お国柄によることもあり，これまで世界的な基準はなかった．ここでは詳しい歴史は省くが，1980年にキューでは，Draft Index of Author Abbreviations：Flowering Plants を出版した．菌類，海藻，化石その他でも統一に向けた委員会がもたれ，まとめられたのが本書で，およそ3万名の植物学者名が記録されている．本書に従えば原寛先生は日本で慣用される Hara ではなく H. Hara, Friedrich（Karl）Schmidt は Fr. Schm. ではなく，F. Schmidt，伊藤洋先生は H. Itô，伊藤浩司先生は Koji Ito（長音記号なし）となるなど，多少とまどいがないでもない．もっと